

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

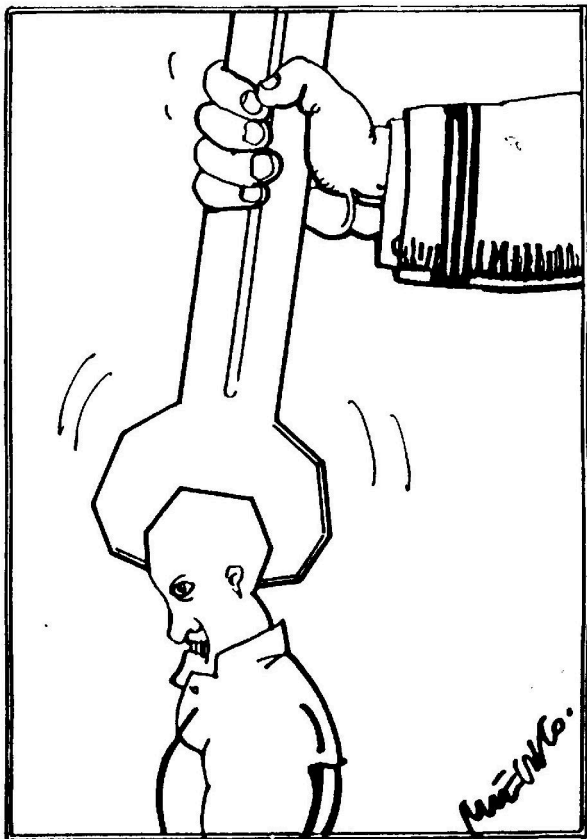
1986年

ポーランド月報

5月号
(通巻50号)
400円

ポーランド労働者の意識状況

トルン「連帯」地方執行委員会綱領



態勢確立のために…………… 3
 ——トルン「連帯」地方執行委員会綱領

政治囚の釈放を…………… 7
 L・ワレサ E・リピンスキ

世論調査に見る
 ポーランド労働者の意識状況…………… 8
 『週刊マゾフシェ』

若者たちにもっと近づこう……………12
 ヴロツワフ「連帯」活動家
 付：シロンスクの青年は考える……………15

「自由と平和」運動：
 運動の拡がりりと活動家の逮捕

支援を訴える国際アピール……………16
 逮捕に抗議するハンスト 参加者の声明 ……17
 われわれの目的 われわれの見解(続) ……18
 兵役を拒否する「エホバの証人」……………19

地下定期刊行物の現況……………20
 『週刊マゾフシェ』収書部

ポーランド料理……………22
 ポーランド日誌…………… 2・23

ポーランド日誌

1986年 2月21日～ 3月31日

2月21日 最高裁、A・ミフニクとB・リスの2人について「情状」をくんで減刑、W・フラシニクについては上告を棄却。

2月22日 ワルシャワ放送によれば、「数日前」ボルコヴィツェ銅鉱山で新労組が「作業を中断する抗議行動を開始した」という。これは新労組結成以来始めて伝えられたストライキである。

2月24日 B・リス、獄中で待遇改善を要求してハンストを開始。ハンスト中の「連帯」活動家4名(C・ビエレッツキ、A・グルスキ、E・クラソフスキ、W・ヴォロニエツキ)の生命を懸念した請願書がヤルゼルスキ将軍に提出される。請願書には600名の署名が。

2月25日 P A P通信によれば、「国民の生活条件と国防、経済の改善という最重要課題の達成のため」、国営企業の労働時間を1日8時間、1週46時間に延長する権限を企業長に与える布告が制定される。官製ポーランド作家同盟の大会が始まる。旧作家組合のメンバーの40%にあたる710名しか加盟せず。

2月26日 官製作家同盟、W・ジュクロフスキを議長に選出して大会を終了。

2月28日 ワルシャワのオーストラリア大使館代表が外相を訪ね、獄中でハンスト中のC・ビエレッツキの健康に懸念を表明。

3月1日 公式報道によれば、この日から映画入場券が値上げ。「最も魅力的な映画」で150ズウォティに。

3月3日 ワルシャワでL・モチュルスキラK P N (ポーランド独立連盟) 指導者5人の裁判が始まる。新労組全国組織O P Z Z執行委員会は、政府による労働時間延長の試みに対して「否定的態度」を表明。

3月4日 社会問題研究所のA・ライキエヴィチ教授のP A P通信インタビューによれば、ポーランドの一部工場では週平均実労働時間は22時間にしかならないが、その主たる原因は、労働規律の低下ではなく、原料供給の不規則、極端に悪い労働組織、鉄道の遅れ、通勤の不便、衛生条件の悪さ、不必要な会議や集会、勤務時間中の当局からの呼び出し、等にあるという。ワルシャワでヨーコ・オノのコンサート。

3月5日 最高裁、「連帯」援助の罪に問われた2名の警察官の刑を引き上げる。ポーランド科学会議が3日の予定で開幕。いくつかの報告書がポーランドの環境破壊、保健衛生状態の悪化を厳しく警告。

3月6日 1月に逮捕されたボグダン・ボルセヴィチに対し、力による政府転覆の陰謀の容疑がかけられていると伝えられる。

3月7日 ポーランド政府と西側債権国政府との間で本年中に期限のくる借返済の繰延べ協定が成立。繰延べ対象は16億ドルと伝えられる。

3月10日 法務省監獄局長によれば、現在獄中でハンスト中の政治囚はC・ビエレッツキ、A・グルスキ、E・クラソフスキ、W・ヴォロニエツキの4名のみという。

3月11日 Z・シャヴィダ副首相に率いられた政府代表団が第6回ポーランド・ドイツ経済会議出席のためボンに到着。西ドイツはポーランドに1億マルク(約4500万ドル)の輸出信用供与を申し出 [23頁に続く]

態勢確立のために

トルン「連帯」地方執行委員会綱領

“Budować gotowość” — Program Regionalnej Komisji Wykonawczej NSZZ
“Solidarność” w Toruniu, Biuletyn Informacyjny nr. 135-136, 02.04.86

【「連帯」バリ通信編集部解説】 「態勢確立のために」と題されたトルン「連帯」地方執行委員会の綱領はわれわれの手に届いた綱領文書の1つである。この文書は、ポーランド全上の地下活動家たちの一般的な考え方をよく反映していると同時に、それを現在の状況に合わせてまとめた綱領の、1つの具体例であるように思われる。

われわれは、第2次大戦後に始まったヨーロッパの分割と、それが今なおわれわれの国家に主権を持つことを許さなくしている制限とをよく理解している。しかしながらわれわれはわれわれの目標を放棄するわけにはいかない。われわれは、ヨーロッパの全般的政治状況が変わらない限り、ポーランドでは何ひとつ変化は起きないとする考えとは断固として袂を分かつものである。われわれの国の変化は何よりもまずわれわれ自身にかかっているのだと思う。そのことはわが国の現代史が証明している。

われわれの考えでは、共産党権力が最も強力に攻撃をしかけてくるのは、組織された社会的抵抗を受けない場所である。この抵抗活動（最も活発な組織が「連帯」である）のおかげでわれわれは、弾圧があるにもかかわらず、共産圏ではいちばん自由な社会なのである。この考えはわれわれの励みになり、われわれが目標に向かって1歩1歩近づき希望を与えてくれるのだ。……

国内状況

戒厳令の施行以来、国内の状況は悪化の一途をたどっている。社会と権力の関係は完全に絶たれた。その結果、効果的な国家運営は不可能になり、経済は沈滞し、国民は貧窮に陥った。加えて、工業生産は減少し、投資が制限されて生産手段の陳腐化が起きている。700万人以上のポーランド人が社会的最低限以下の暮らしをしている。人びとの抵抗力が衰え、それは罹病率や乳児死亡率の増加、結核の国民病としての復活という形ではっきり現

われている。現在の状況は市民の精神状態にも影響を与えている。うつうつとした生活はしばしば病的となり、その最も重大な例がアルコール中毒と麻薬中毒である。百年來、倫理的規範と認められてきたものが滅び、無数の卑しむべき犯罪がはびこり始める。労働は無為に費され、かくも重要な人間活動の一分野が退廃してゆく。……

われわれは何者なのか？

われわれは、独立自治労働組合「連帯」であり、1981年10月のグダンスクにおける第1回全国大会で採択された長期的な行動綱領を持っている。またわれわれは、まず第1に、全体主義権力に抵抗する市民の運動であり、人間の基本的自由を求めて戦う運動である。われわれが活動するのは、できるだけ広範な社会の人びと、すべてのグループ、階層を包含する、平和的手段による改革を求める戦線を構築するためである。民族、伝統の違いにもかかわらず、われわれを結びつけているのはそれぞれの目標の共通性、すなわち、より上位の目標である主権を持った民主的なポーランドなのである。……

戒厳令の経験、労働組合やさまざまな芸術家たちの協会、その他諸組織の非合法化、さらに、無法を合法化した権力、これらはわれわれに、われわれが誇り高く生きようのは民主的な祖国においてのみであることを教えてくれた。それゆえ、われわれのいまの戦いの、そしてこれからも続くであろう戦いの目標とは、以下の通りである。

1 世界観、社会観、政治、文化の多元主義。

2 さまざまな所有形態の並存に基づく、国民の物質的欲求を現実化する基盤をつくりあげるために有効な経済体制。それは同時に社会的公平の原則の尊重を伴わなければならない。

3 さまざまな自治組織、自治団体の代表としての国家最高機関。ここでは、国会〔セイム〕に対する代表権の承認をいかにして普遍的なものにするかが問題となるが、それは、すべての政党、社会団体、市民グループが自由に立候補できるようにすることで可能になる。

4 実を伴った地方の主権。これにより、法的および組織的、かつ、財政的に自立した地方自治体の創設が可能になる。

5 司法の独立。捜査機関は社会の監視の下に置かれる。

今日の現実からして、これらすべてを手にするまでにはまだ長い年月の活動と、そのために有利な政治状況が必要であることをわれわれは知っている。われわれはその機会が必ずやると確信している、それゆえ、そのための態勢を整えておかなければならない。

戒厳令の導入と、1981年12月13日以後の権力がしかけたさまざまな行為が、われわれに次のような短期的目標を掲げざるをえなくさせている。

a すべての政治囚の無条件釈放。

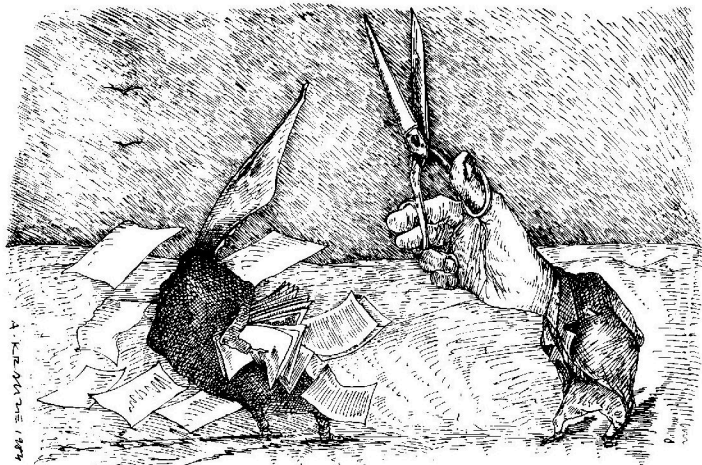
b 1982年10月8日付法律の廃止、すなわち、独立自治労組「連帯」、およびその他の組合の合法性の回復。

c 1981年12月13日以後に国会で可決された弾圧的性格を持つ諸条項の廃止、あるいは、せめて改正。これはすべての市民が政治の圧力または司法の圧力を受けることなく自立した社会活動ができるようにするためである。

経済の分野においてわれわれは、可能なところから、のべつまくなしに行われる物価値上げやその他の経済的搾取に抵抗する運動を組織してゆくことになる。社会の経済状況の改善は、ひたすら、正しいやり方による首尾一貫した（すなわち、社会の人のびとの監視の下、社会全体が真にそれに参加することによる）経済改革の実施にかかっている。政治的性格の変化のみがそうした参加を促すことができる。それなくしては決して成功のチャンスはない。

「連帯」——自立した社会活動の組織者

民主的改革を求める戦いで効果をもつのは、ただ、連帯した社会、みずからの目的を自覚し、献



身と自己犠牲の気持を持った社会、そして何よりもまず、権力から自立して組織された社会のみである。そうした社会の建設、その戦いに向けての準備、それは「連帯」の最重要課題である。この課題を前にしてわれわれの活動は次の3つの方向で発展させなければならない。

- a 人と人との結びつきの強化、社会の組織化。
- b 社会の人びとの自己認識と政治的教養の確立。
- c 社会から主体性を奪おうと狙う権力のありとあらゆる行為のひとつひとつに反対する活動を通して権力に不断の圧力をかける。

これらの方向でわれわれの活動がどこまで成功するか、社会のどれくらいの部分をわれわれの活動に包み込むことができるか、わが国の民主的改革のテンポはここにかかっている。

下心のない援助の手ほど人びとを結びつけるものはない。助けを求めている人がいるところにはどこでも「連帯」の組合員がいるべきである。ありとあらゆる手段を使って、何よりもまず自分たちの力に頼って、援助の手をさしのべるべきだ。まず第1に援助の対象となるべきなのは政治囚とその家族、権力に弾圧されて生活の糧を奪われた人びとである。物質的な面での相互扶助は以下によるべきである。

——組合規約に定められた組合資金の支出（これについては、たとえば大規模職場のように、それが可能などころで）

——相互扶助と貸し付け金制度の組織化

——カンパ

——寄付されたり贈られたりした衣服や食料の分配

——個人農との直接交渉による独自の食糧備蓄の組織化（無償提供、あるいは農作業の手伝いと引き換えに）

非物質的な援助の面では、

——自立した社会的活動のゆえに逮捕、弾圧、首切りの脅迫を受けている人びとへの法律面での援助

——脅迫を受けたり、実際に被害を受けた人たちに助言や援助ができるように、組合員が労働法について広い知識を持つための学習会

——農民向け法律相談の組織化

——仕事の斡旋

——病人、身体の不自由な人、身寄りのない子供たちの庇護を教会と協力して行う（これは、社会の病気を予防するため）

公式マスコミ全体のうそや、猛威をふるう検閲、教条の押しつけ、創作の自由の制限、報道の分野における社会軽視について、「連帯」は他の独立した組織と協力して、円滑な、非公式の情報の流れ、いわゆる、もうひとつの文化をつくりあげ、独自の世界を建設しなければならない。ゆえにわれわれの運動も以下のような方向で実践し、発展させなければならない。

——検閲を受けない自立した新聞、本、その他印刷物の発行や、ラジオ放送、カセットの配布

——自立新聞、出版物を広い地域の読者に配るための組織化

——労働者大学の組織化（これは、大学や、公の場で活動している芸術家、学者の協会、および、その性格上、とくにこうした活動に向いている諸団体との協力による）

——自立図書館ネットワークの組織化

——政治、経済、法律に関する自立した思想の宣伝、普及

——専門家グループによる将来の共和国改革案の起草と、その起草案の自立出版による刊行

——政府の権力乱用と弾圧の記録収集とその資料の公開

——自立した芸術家の作品を、非公式の文化的催しを組織したり、奨学基金を設立したり、本の出版を可能にしたりして助ける。

われわれの組合はこうした活動の重要性をよく理解している。これは最高の賭金、すなわち、社会の意識、その主体性がかかった大勝負なのだ。とりわけそれに関係が深いのは若者たちである。ゆえに、その普及に責任を持つ活動家たちは、集まりに参加した人びとが、伝統に根づいたもの、すなわち、ポーランドの歴史やポーランド文化の歴史以外に、少なくとも、経済学、社会学、政治学の基礎的な知識は身につけられるようにしなくてはならない。そうした知識のみが、現代の民主主義と全体主義が機能するメカニズムを知ることが可能にする。そうした知識のみが人びとに現代の政治状況において自分たちの置かれた位置を教えてくれる。

* * *

これまでに述べたように組合の活動が社会生活の「水面下」における、忤のおれる組織活動に力をそそげばそそくほど、権力に対する圧力の影響は「水面上」に姿を現わしてくる。そうすれば、自明のこととして、プロパガンダは大きな共感を呼び、人びとに勇気を与え、これからの戦いを力づけてくれる。

この形式の活動には次のような社会的現象や行動が伴いうる。

—社会的、経済的問題に関しての企業管理部や所轄官庁へ要求提出

—抗議文の署名集め

—密告者など、体制協力者の村八分

—エセ選挙のボイコット

—体制による催しのボイコット

—体制側組織（新労組やPRONその他）のボイコット

—ピラ、プラカードによる行動や、その他、宣伝、普及の性格を持つ行動

—平和行進

—さまざまな形のストライキ（最近の経験によれば、よく準備された経済的目的を掲げるストライキは勝利できる）

* * *

どうしたら政府に改革を実施させられるかは、今のところ分からない。しかし、最大の武器がゼネストであることは知っている。もしかすると、将来、われわれにはその武器を取るように呼びかける以外の道がなくなるかもしれない。その可能性を考慮に入れ、われわれの組織の潜在能力の強化に力を入れなければならない。

「連帯」は組織として強くならねばならない

「連帯」は現在、社会の自由と政治的、経済的権利の獲得をめざす戦いにおける主力である。社会の自立達成と主権拡大、すなわち、自治共和国の実現は、われわれの組織能力如何にかかってくるだろう。ゆえにわれわれのすべきことは、

—工場秘密委員会の新規組織化と、既存の工場ではその委員会の活性化

—各経済分野ごとの執行委員会設立

—地方執行委員会のすべての活動家（印刷、配布、編集、宣伝普及、人目をひく活動をするグループ、相互扶助、など）の水準を高め、拡充する。これは工場秘密委員会の活動家の義務でもある。

—農村の活動家たちと連絡をとり、その運動の再構築を助ける

—生活援助活動の拡大

—あらゆる組合レベルとの連絡網の確立

* * *

「連帯」の行動計画を描きながら、われわれは、われわれの活動が孤立することはないであろうという確信を深めている。われわれには社会の力強い支持があり、教会の道義的支持があり、他の自立したグループ（かれらはわれわれと基本的には共通の行動計画と、暴力と押しつけを排した方法論を持つ）との協力がある。またわれわれには学術界、芸術界との協力がある。

独立自治労組「連帯」

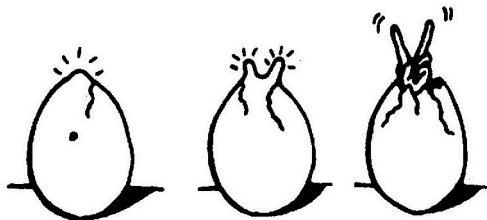
地方執行委員会

トルン 1985年1月

〔「連帯」パリ通信第135/136号

(1986年4月2日)

訳：篠崎誠一〕



政治囚の釈放を

L・ワレサ／E・リピンスキ

Appeals on Political Prisoners, L. Wałęsa / E. Lipiński
Uncensored Poland News Bulletin, No. 3 / 86 30 Jan. 1986

1986年1月9日 レフ・ワレサ

われわれ、かつての政治囚および拘留者は、不当に投獄されている人々とその家族に対し精神的、物質的援助を与えるよう、ポーランド国民に訴える。4年前の戒厳令の布告以来、政治囚はポーランドの生活の恒久的要素となっている。度重なる恩赦や特赦も事態を大きく変えるものではなかった。現在260名余が政治的活動および労働組合活動のゆえに獄中にあり、あるいは逮捕されて尋問を受けている。彼らの釈放は国民の基本的要求であり、当局と社会の対話の不可欠の前提条件である。ポーランドの統治の仕方が根本的に変化し、国民の主権が承認され、不可侵の人権が尊重されないかぎり、ポーランドの社会平和は不可能である。

もうひとつの問題は、監獄と拘留所のきわめて抑圧的な条件である。一般犯罪者は、矯正されるどころかますます深く墮落させられ、正常な生活への復帰が不可能になっている。刑罰制度と政策の抜本的改革が不可欠である。

政治囚はとりわけ耐えがたい状況に置かれる。彼らは、地位を利用した看守の恣意の対象とされる。激しい殴打もまれではない。場合によっては囚人たちは最も思い切った抗議行動に追いやられる——ハンスト。政治囚としての法的地位が認められるべきなのはこのためである。だが、抑圧と暴行に対する最も有効な武器は、国の内外の世論の圧力である。

逮捕投獄はつねに、残された家族に手痛い打撃を与える。家族はしばしば生活手段を奪われる。周囲の配慮と援助がはかりしれない価値を有していることをわれわれは経験から知っている。仲間の労働者や、教区や地域の隣人たちすべてが政治囚とその家族を援助するよう呼びかけたい。彼らを運命に委ねてはならない。

弾圧犠牲者のための基金を設けよう。釈放者

の社会への再適応を援助しよう。これは、われわれの連帯の最初にして最大の試練である。

1986年1月15日 エドワルト・リピンスキ

1985年11月1日、77名が声明を發し、ポーランドにおける良心の囚人の地位の確立、監獄条件の改善、良心の囚人の釈放、そして報復政策の中止を要求した。この声明にはその後、あらゆる社会的集団、階層を代表する各地の何千という人々が加わった。1985年12月31日現在、署名者は3万5,775名に達する。声明文は、閣僚評議会や国連人権委員会、ヨハネパウロ2世、ポーランド首座大司教にも送られた。この声明が今も関心の的たり続けているのは当然である。1985年10月の政治囚釈放令は225名に適用された。これにより多数の政治囚がクリスマスを家族とともに過ごせるようになったことは喜ばしい。これはおそらく、多少とも社会の期待に応えるものである。しかしその一方で、まだ何10名という人々が、労働組合活動や政治的活動を理由にして捕えられたままである。われわれが知りえた限り、ポーランドには今、230余名の良心の囚人がいる。ポーランドの世論が、この声明に盛り込まれた諸要求すべてをポーランド人民共和国が受け入れると期待していることをわれわれは確信する。

政治囚釈放要求声明署名者を代表して。

〔訳：水谷 曉〕



世論調査に見る

ポーランド労働者の意識状況

『週刊マゾフシェ』

Polish Workers in mid-1980's by "Tygodnik Mazowsze"
Uncensored Poland News Bulletin, No. 6 / 86, 20 March 1986

【編集部注】 以下に紹介するのは、ポズナンの社会学者集団の研究を基にして、『週刊マゾフシェ』第157号(1986年2月6日)に発表された最近の労働者の意識の分析である。基礎となった調査では、各地の大工場——ポズナン(ツェギェルスキ金属工場)、ワルシヤワ(製鉄所)、シチェチン(ワルスキ造船所)、およびポーランド西部の地方都市コジエホヴォ(モーター工場)——の労働者600人以上がサンプル抽出された。調査対象は大部分がブルーカラー労働者であるが、一定数のホワイトカラー労働者および経営職も含まれている。『週刊マゾフシェ』によれば、調査結果は全体として、ポーランド全上の産業労働者の態度を近似値的に示すと考えてよいという。

あこがれの的：民主主義

望ましい政治制度の特徴として労働者たちは、言論の自由(75%)、政策決定過程への市民の参加(64%)、競合的政党の存在(62%)をあげた。政府当局への服従を選んだのはわずか16%で、党の指導的役割は13%、そして反対派の自由の制限を良しとしたものはわずか5%にすぎなかった。具体的な民主主義の手段に関しては、82%が複数候補者名簿の有効性をあげ、87%が完全な労働者自主管理を要求した。

「連帯」合法期以来、理想的体制に関するイメージは変わっていない。ポーランド流の現存社会主義を普遍的解決策としたのはわずか17%で、ハンガリー方式は11%、ユーゴスラヴィアの自主管理制度と非同盟路線は12%の支持を得た。これに対し30%がスキャンディナヴィア諸国とイギリスを真の社会主義国とした*。他はそもそも社会主義を国家制度としては否定した。

* [英訳者注] この点は、保守党と労働党のいずれのイギリスにとっても皮肉のように聞かえる。このような奇妙な判断が出てきた理由はおそらく次の3つである。

1) ポーランドの労働者の多くは、イギリスが誰によって、どのように支配されているのかについて、漠然とした知識しか持っていない。

い。

2) 彼らはサッチャー首相の基本的立場を多少は知っているかもしれないが、今なおポーランドよりもイギリスの方がより社会主義的だと信じている。

3) 彼らは、イギリスの民主主義の伝統に関する指摘を、福祉国家——彼らも当然共鳴する社会主義の理想——のそれと混同している。

その一方で労働者たちは、とりわけ経済的問題に関しては、今なお社会主義イデオロギーをかなり好感しているように見える。望ましい体制の特徴として57%が国有化経済をあげた。生産手段の私的所有をあげたのはわずか11%であった。57%が計画経済に賛成、40%が自由企業に賛成した。しかしながら経済問題に関しては労働者たちはあまり首尾一貫していない。たとえば、60%が失業に反対したが、80%が非効率な従業員の解雇に賛成し、51%が最高賃金の引き下げを望んだのに対し89%は熟練度に応じて異なる報酬を支持した。61%が私的企業の育成に賛成したが、ちょうど同数がその利潤を制限することに賛成した。しかしほぼ全員(92%)が国営ないし協同組合農業に対し、個人農業を選んだ。

危機はいつから?



楽しいイースターを

労働者たちは危機の主たる原因を指導者たちの悪行と欠点に見ている。すなわち、腐敗と権力の乱用（90%）、ギエルク政権の誤った決定（89%）、ヤルゼルスキ体制（62%）。「危機は体制とは無関係で、われわれは指導者に恵まれなかったにすぎない」という指摘に3分の2が同意した。体制の欠陥が2番目に来る。すなわち、自主管理と真の労働組合の不在（61%）、党の影響力の肥大化（65%）、民主主義の不在（65%）。「経済の破滅をもたらしたのは体制に内在する悪である」という思い切った指摘は人気がなく、20%の支持を得たにすぎなかった。回答者の半分が危機の原因として国民的悲弊（泥酔、道徳心の低さ）をあげた。社会主義の敵（破壊活動、反社会主義分子、反対派）を非難したのは20%以下で、自然災害をあげたのはわずか1%であった。

懐疑と不満

戒厳令とこれに伴う諸施策は承認されていない。65%が戒厳令は民主化の過程に終止符を打ったと答えた。加えて74%が、PRONと新労組が国民的和解の基礎を据えつつあるという主張に同意しなかった。経済の分野では懐疑はこれほど顕著ではない。39%が経済改革が効果をあげつつあることを認め、危機の克服を可能にすると答えた。それでも労働者の半数は、祖国が全き混乱状態にあり、これが貧窮を加速していると考えている。

工場内の状況はワルシャワとコジュホヴァではまったく異なるとらえ方がされている。前者では53%が対立が激化しつつあると答え、後者では同じ答えはわずか19%であった。指摘された対立の原因は、労働組織の欠陥：62%、賃金格差：56%、ボーナス配分の不平等：51%、等であった。党と組合への加入が対立の原因とする見解は第7位で、27%であった。……

回答者の4分の3近くがポーランド人の大半が不満だと考えている。労働者のどの集団が満足すべき理由（+）と不満の原因（-）を有しているかが分析された。その結果は次のとおりである。

警官	+72%
軍人	+70%
党活動家	+66%
私企業経営者	+41%
鉱山労働者	-6%
農民	-21%
事務職	-27%
科学者	-33%
芸術家	-39%
エンジニア	-50%
工業労働者	-83%

不満の主たる原因として指摘されたのは、物価高（85%）、市場への供給不足（68%）、投機すなわちヤミ市場（45%）、およびふたつの政治的

問題、すなわち政府当局による世論の無視(42%)と1980年8月後の譲歩の帳消し(34%)であった。

レーガン大統領 2.2(32%) 3.2(58%)
 チェルネンコ書記長 2.2(32%) 4.2(80%)

願望

将来についての質問に対する回答では、33%が市場の安定と供給の改善を、25%が危機の克服を、18%が住宅の増大を、15%が体制の民主化を、同じく15%が生活水準の向上を、それぞれ望んだ。独立労組を望んだ者はわずか2%、マスメディアからのうそつきイメージの払拭を望んだものは3%にすぎなかった。これは意外である。一般に「連帯」合法期は1918年(この年に独立)以降のポーランドにおける、戦後土地改革や産業の国有化、あるいはナチス・ドイツの敗北などを越える最も積極的な事態と見られているからである(最も不人気な歴史的事態は、他を抜きん出て戒厳令の施行であった)。

全体としての国と職場に関する願望は、社会および福祉に関する問題(それぞれ90%)、組織的問題(50%)、経済的問題(64%)に集中した。政治的要求が少ない(24~40%)のは無力感に起因する。国民福祉の問題に積極的影響を及ぼせる状態にあるかという質問に対しては60%が否定的に答え、自分の職場の諸問題に対する自らの影響力をごくわずかなしゼロと回答した者が86%を占めた。

政府当局と情報源

労働者たちは誰を信用しているか。ポーランドの状況に対し影響力を行使しているように見えるのは誰か。10名について5段階による評価が試みられた(%による評価を追加しておく)。

	信用度	影響力
ヨハネ・パウロ2世	4.6(90%)	3.4(63%)
グレンプ首座大司教	4.0(76%)	3.3(61%)
テクエヤル国連総長	3.4(63%)	2.1(29%)
ワレサ委員長	3.1(54%)	2.2(32%)
ヤルゼムスキ將軍	3.0(51%)	4.4(85%)
ドブランスキPRON議長	2.6(41%)	2.8(46%)
ブヤクTKK委員長	2.3(34%)	1.9(24%)
ラコフスキ副首相(当時)	2.3(34%)	3.5(63%)

労働者たちは得た情報をどこで確認するか。彼らはどのような情報源を信用するか。最も多い情報源は口伝え(78%)であるが、その信用度は低い(46%)。次に多い情報源はマスメディア、すなわち国営ラジオ・テレビだが、信用度はわずか31%である。外国ラジオ放送は27%が聞いており、信用度は30%である。非公式情報源(地下出版および地下放送)は15%が接し、信用度は14%、党出版物はそれぞれ7%および2%である。ワルシャワと地方、たとえばコジュホヴォとの間には大きな違いがある。ワルシャワでは、テレビを利用しこれを信用する者が46%および26%であるのに対し、コジュホヴォではそれぞれ83%および36%である。首都では労働者の25%が地下紙を読み、24%がこれを信用しているのに対し、コジュホヴォではそれぞれ7%および2%にすぎない。

いかにしてポーランドを救うか

調査結果によれば、現在の諸条件の下で最も重要なことは、「家族の中、および友人たちの輪の中で民族的伝統の維持に気を配ること」である——90%。79%は、自主管理機関、地方議会、国会に関する法律が順守されることを考えた。しかし76%は政治情勢に影響を及ぼすことは試みず、誠実に働くこととした。55%が自分自身と家族の福利の維持を選んだ。使命感を大事にする態度はあまり人気がない。教会におまじりすることに救いを見出す人は35%、反対派を支持する人は27%、党綱領の採用に救いを見る人も同率であった。労働者たちは合法的な行動様式を望んでいる。自主管理評議会の会議で発言する(72%)、経営陣に請願する(70%)、政府当局あて書簡に署名する(67%)、等。調査対象者の3分の1がこうした行動を非常に効果的とした。ストライキが第4位を占めた。52%がこれに参加すると答え、21%がその有効性を信じていた。その他の抗議形態としては、党による介入(36%)、新労組(31%)、公式新聞への投書(45%)があげられ、それぞれ15%、11%、6%がこれらを有効とした。最後に、紛争が生じれば工場を去ると答えた者が26%、作

業速度を落とす者が21%、指示に従わない者が19%であった。しかし、こうした受動的抵抗が有効だと考えているのは1~4%にすぎなかった。……

党员、経営職、ブルーカラー労働者の差

前2者の回答は、ブルーカラー労働者の回答と多くの点ではっきりと異なっていた。圧倒的多数とは対照的に、彼らは単一政党制を支持し、自分自身とポーランドの未来をより楽観的に見直し、危機の原因を社会や「敵」に求め、そして自らの工場内で紛争に責任があるのは経営陣よりも労働者である、とした。当然のことながら、彼らは労働者一般に比べてテレビをよく見、非合法紙はほとんど読まない。彼らはヤルゼルスキを信頼し、「連帯」指導部にはほとんど、あるいはまったく信用を置かない。しかし彼らの教会関係者に対する態度は他の労働者と同じである。

専門家たちの見解は党活動家のそれと大体同じだが、その職業的利害をより強く反映している。たとえば、エンジニアの80%は解雇に賛成だが、これに賛成する労働者はわずか20%である。同時に彼らは、工場内の諸問題に対する自らの影響力の小ささに不満を抱いており、職業上の満足感是非常に低い（マイナス96%）。

年齢と教育水準

労働者たちの見解は年齢と教育水準に応じて異なっている。高齢者ほどあまり急進的でない見解を述べる傾向にある。これは教育水準の低い労働者も同じである。彼らは、その他の労働者に比べてテレビをよく見、危機の原因を体制の敵と自然災害に求め、政府当局を信頼し、反対派よりも教会を支持した（40~50歳）、あるいは党のみを支持した（50歳以上）。

「連帯」支持者の中心は、教育水準の高い熟練労働者で、年齢は30~40歳である。これより若い世代（20~30歳）は「連帯」支持はやや弱い、現存社会主義やそのイデオロギーの基礎に対する反対はより強い。彼らは、経済および企業経営の分野だけでなく、政治の分野においても変化を要求しており、体制と危機の間に明かな関連性を認めており、他の世代よりも強く反対派を支持して



いる。30~40歳グループはまた、教会と党よりも反対派の活動の中こそ、祖国にとってより大きな利益を見出している唯一の世代であった。……

政府と「連帯」

大工業企業労働者の25%は政府当局を支持しているが、残りは戒厳令後の体制の受け入れを拒否している。しかしこの受け入れの程度は、全体的理念からより具体的な問題あるいは権力を握る人物の人格の問題へとさかのぼるにつれて高くなる。

「連帯」に対する支持については逆が言える。理念やシンボルのレベルでは支持率は高いが、具体的な地下活動が問題となると支持率は下がる。

「連帯」に忠誠を宣言するのは20~25%に達するが、地下「連帯」の諸活動への参加はずっと少ない（たとえば、地下紙を入手するのはわずか15%である）。圧倒的に多い態度——あきらめと私生活への引きこもり——は、無力感および悲観主義と結びついており、これによって強化されている。

〔訳：水谷 駿〕

若者たちにもっと近づこう ——ヴロツワフ「連帯」活動家

付：シロンスクの青年は考える

La Génération d'après "Solidarité"
"Solidarność", Bulletin d'Information, No. 135/136, 02. 04. 86

【編集部注】 戒厳令後の今日のポーランドの若者たちの意識状況を伝える資料をふたつ紹介する。ひとつは、地下紙『週刊マゾフシェ』第151号(1986年1月16日)に掲載されたヴロツワフのある「連帯」活動家のインタビューの一部、「若者たちにもっと近づこう」であり、もうひとつは同じく地下紙『K O S』第88号(1986年1月27日)に掲載されたオポレのシロンスク研究所がシロンスクのリツェウムおよび職業学校の生徒約400人を対象にして行ったアンケート調査からの抜粋である。本誌8～11頁の大工場労働者の意識調査とあわせて、現在のポーランド国民の意識状態の一面を示すものである。日本と同様、ポーランドにおいてもある種の「新人類」が登場しつつあるようである。〔訳：水谷 駿〕

私はずっと以前から青年の問題に関心を持ってきた。「連帯」の活動家にこのことを語り、さまざまな会議でこの問題を提起してきたが、まったく無駄だった。この問題がきわめて重要であることにはすべての人々が同意するが、しかしそれまでである。それは悪意のためではなく、無力のためである。16歳から20歳の若者にどう接すれば良いのか誰も知らない。どんな協力も行われていない。「連帯」の人々は型にはまった考えしかできない。彼らは言う。「彼らももっと成熟するのを待たなければならぬ。彼らが労働者や学生になるのを待たなければならぬ。そうすれば彼らを助けることもできるだろう」。

17歳から20歳の今の若者たちは信じがたいほどつらい世代なのだと思う。彼らはわれわれの世代に比べてさびしいのだ。この先彼らがどうなるかは知らない。われわれが印刷機を輸入したのとちがって、彼らは武器を輸入するかもしれない。だって、彼らの未来はどうなるのか？ 彼らはこんなふうに歌う。「アパートの一室が手に入るのは2010年」。これを開けば、君の心は絶望にとらわれる。まさしく希望のかけらもないのだ。だがそれにもかかわらず、彼らは何かをしようとしている。それも多少とも組織的なやり方で。彼らは自分の生に何らかの意味を与えようとしている。叛徒たちはどのくらいいるだろうか？ たとえごく少数だとしても、彼らは重要な少数なのだ。

ポーランド人民共和国のこの恐るべく物悲しい現実の中で、この灰色のまっただ中で、若者たちは自分の力で道を求め、自分を変えようとし、何かをやらうとしている。このために高い代償を支払っている。体制は、彼らを恐れるがゆえに彼らを撃つ。その最も悲劇的な例がグジュゴシ・ブシェミクとマルチン・アントノヴィチ(2人とも警察に拘留されたあとで死んだ)の2人だ。

バンクルククの青年運動：R S A

人が何と考えようと、髪をピンクに染め、イアリングをつけ、鉞を打ったジャケットを着たバンクルククの若者もまた、自由のひとつの形の表現者である。私の世代にとっては、若者のこのアングラ文化は奇妙で理解しがたいとはいえ、自由はつまるところわれわれの心に迫る何かである。だが彼らにとってはそれはひとつの生き方であり、イデオロギーであり、ほとんど宗教にも等しい。レゲエの音楽を愛するポーランドのラスタファリアンである彼らパンクたちはインターナショナルな青年たちに属する。ポーランドではパンクたちはその自由の行いのゆえに懲らしめを受ける。その身なりだけを理由に、おまわりは彼らを薄暗がりへ連行して殴りつける。月に少なくとも1回、48時間の拘留をくらう16歳と17歳の若者を私は知っている。

昨年グダンスクに「新しい社会を求める運動」(RSA)が生まれた。昨年のメーデーのパレードで最も目立ったのは彼らだった。数100人が髪にピンクとグリーンの飾りを突き立て、黒のジャケットをまとい、青いサングラスをかけていた。目を見張るながめだった。大きな黒の旗には血のような赤でスローガンが書いてあった。「『連帯』は開く」。彼らの装いはパンク風であると同時に、「連帯」から借りて来た要素とアナキストの黒を含んでいた。

これら若者たちは、大体が職業学校の生徒たちであるが、中には大学生もいる(ポーランドの中等教育レベルには、生徒の能力にあわせて基本的に3種類の学校がある。最も水準の高いリツェウムでは職業教育は全然なされず、この最も優秀な生徒たちには大学入学の可能性が開かれている。最も程度の低い職業学校では基礎的な職業教育が行われる。この両者の中間に専門学校が位置する。職業学校と専門学校をあわせて一般に職業学校と呼ばれる——英語版注)。その大多数はグラブウエクやピロニアの労働者街に住む。彼らはまたすべてがグダンスクのサッカー・チーム、レビアのファンであり、レビアのサッカー競技場が彼らのたまり場のひとつともなっている。

彼らのイデオロギーの宣言を読んだことがあるが、それはアナキスト的、平和主義的である。だが彼らの平和主義はいささか特殊なもので、彼らによれば、たとえばZOMOに攻撃された時、人は受け身でがまんしているべきではない。私には彼らが若者たちを動かそうとしていることが、共産主義者たちから注目されようとしていることがわかる。彼らは、16~20歳の若者が集まるところにはどこへでも姿を見せる。昨年のヤロチン音楽祭で、集まった若者たちにアピールしようとしたのは彼らだけだった。そこに集まった2万以上の若者に訴えるというまたとない機会を、彼ら以外、誰も利用しようとしなかった。ヤロチンでRSAは非常によくできた選挙(昨年10月の国会選挙)反対のリーフレットをまいた。その非宗教的イデオロギーにもかかわらずチェンストホヴァへの巡礼に参加し、そこでも同じようなことを試みている。

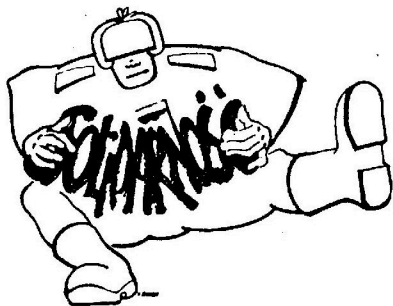
彼らは、ピラまきやスローガンの落書きなどの街頭行動にも参加するし、デモでは最も行動的の

ある。ZOMOに対しては自衛する。彼らは、デモに際しては、たとえば覆面ヘルメットをつけて自衛できるし、そうすべきだと信じている。これは子供じみていると思われるかもしれないが、実際、たとえばノヴァフタでは、写真に基いて多数の人が拘留されたのである。私は彼らに注目しているが、彼らがどの方向に進もうとしているのか不安でもある。今のところ確かなことは言えないが、彼らはやがて消滅する単なる一時的現象に終わる可能性もあるし、他方ファシストになり、テロに訴えるようになるかもしれない、あるいは逆にもっと成熟するかもしれない。

RSAは、共産主義者を自然発生的に、ほとんど生理的に嫌悪し、これへの抵抗運動と自らを同一視する。しかし同時に彼らは「連帯」の指導的人物に対してもきわめて批判的である。RSAにとって、彼らは昨日の人物である。教会で行われていることすべて——聖なるミサや集会、歌——を彼らはさげすむ。彼らは、自分たちの方がずっとうまくできると考えており、自分たちはわれわれみたいないかに救いようもなく怠惰ではないと考えている。

実際、彼らはきわめて行動的である。彼らは接触を求めてポーランド中を旅し、彼ら自身の新聞「ホメク」を配って歩いている。彼らはノヴァフタのレーニン製鉄所の労働者たちと意気投合した。要するに彼らのうちの最も若い連中は同じ世代に属するのである。私は、製鉄所労働者の新聞が2号続けてRSAの宣言(しかも全文)を転載し、RSAの街頭行動のひとつを報じ、そのメンバーの1人とのインタビューを掲載したのを読んだ。

ヴロツワフでも同じような運動の萌芽が認められる。「連帯」のいかなる触手を通じても到達できない若者に対して、「ゼロ」と名付けられた新聞の編集者たちが呼びかけを発している。彼ら編集者によれば、今の若者の世代の意識はジェロムスキの著作やその他古典文学や歴史書によっては理解しえないという。そこで「ゼロ」は、若者たちのアングラ文化について多くをとりあげ、「イスラエル」や「アタブレン」といったミュージック・グループのコンサート批評を行っている。彼らは、「連帯」や教会機構から理解を得るにはいたっておらず、またしばしば軽蔑の目で見られもしているが、それでも若者たちの間に読者を得て



満足を感じている。

自主教育サークルの若者たち

同じ年齢層に属しながらもこれとはまったく異なるのが、学校の地下新聞や自主教育サークルにつながる若者たちである。RSAのメンバーたちとまったく異なるのはまさにこの点である。RSAの連中は自立的教育の古典的科目——現代史、政治、労働組合——にはまったく興味を持たない。彼らが強く関心をもつのは、街頭行動の実際の側面や、さらには一般的に陰謀的活動の組織の仕方である。私が話をした彼らはアナーキズムの講義に興味を示した。

こうした自主教育サークルに属するリツェウムの生徒や大学生たちは、若者たちのエリートである。組織的な観点からすれば、彼らの会合はナチス・ドイツ占領期の秘密教育にも似ている。こうしたグループが最も多いのはヴロツワフである——昨年私が数えたところ70あった。それらは、若者が学校教育を終えるにつれ不断に解散されるが、同時に新しいサークルが雨後の筍のように生まれつつある。つい1カ月前、ヴロツワフのサークルは26だったが、今は40近くにもなっている。自主教育サークルが10個もあり、全校生徒の3分の1がこれに参加しているあるリツェウムを私は知っている。これら若者たちは「連帯」に非常に強い関心を抱いている。彼らは、8月後の16カ月間の歴史や地下活動について話のできる「連帯」活動家を招いて話を聞く。私の考えでは彼らは将来のわれわれのカードルである。

「連帯」に直接結びついているのが、ワルシャワのリツェウムの生徒たちが作った「闘う青年連合」(FMW)である。FMWは「連帯」の諸理念をはっきりと自分たち自身のものと認め、暫定調整委員会(TKK)に忠誠を宣言している。彼らは「連帯」に対し、一方ではイデオロギー的、技術的、財政的援助を期待すると同時に、他方では逆行すべき何らかの任務を割当てられることを望んでいる。しかもなおかつ彼らは、組織としての独立性は維持したいとしている。昨年彼らは、値上げ反対および選挙反対のピラマキ活動に参加した。彼らは、自治活動を試み、学校新聞を発行し、1985年12月13日には「沈黙の休み時間」を組織した。

FMWはワルシャワ以外にも広がっている。全国大会にはグダンスク、ヴロツワフ、ノヴァフタ、ゴジュフからも代表が参加した。彼らはRSAとも接触を維持している。「連帯」組織はどれひとつとしてFMWとの協力にあまり関心を示していないが、最近こうした状況も徐々に変化しはじめている。

「自由と平和」「オアシス」……

自立的な青年運動の中で「自由と平和」運動——軍務宣誓拒否と徴兵忌避を中心に結集した——グループは特殊な位置を占めている。このエリート集団の特徴はその行動の公然性にある。何10人がこの運動の宣言文に署名し、軍隊手帳を国防省に送り返している。彼らは年齢もやや上である——30歳を越えるものもいる。私の考えでは、彼ら

は西側の平和運動の中に支持を得ることができよう。

「オアシス」運動に組織されたカトリックの青年について何もふれなかったのは、私が彼らについてあまり知らないからにすぎない。しかし、これが大衆的な運動であり、われわれと同じ価値観を共有していることは承知している。

青年運動について以上述べたことから、それが

多様であり、かつ貴重であることが明らかになったはずである。ところが不幸なことに「連帯」は組織としては、おそらくは自主的教育運動を例外として、青年たちに対してほとんど無関心である。私としては、組合は青年運動を奨励し、援助すべきだと考える。青年たちを何らかの活動、とりわけ地下新聞の発行活動にさえ参加させることに反対する「連帯」活動家を、私は理解できない。

シロンスクの青年は考える

シロンスク研究所（オボレ）アンケート調査

「良い」体制の特徴は何か？

権力の代表者を自由に選挙できる	54.5%
希望するどんな仕事もできる	51.7%
外国に自由に旅行できる	42.6%
………	
結社の自由	12.3%
市民が尊敬する強い政府	9.5%
経済の私的部門の制限と統制	1.6%

戒厳令の施行

1980～81年のスト

「連帯」はどのような運動か？

危機を克服しうる	47.9%
権力をめざす運動	26.2%
反社会主義分子に支配されている	17.6%
不断のストにより経済を損っている	14.3%

現体制の以下の基本諸原理を認めるか？

党の指導的役割	9.8%
ソ連との恒久的同盟関係	9.0%
重工業の国有化	25.0%
自主管理評議会の存在	37.5%
教会と国家の分離	22.9%

どの国民に最も共感するか（5段階評価）

ポーランド人	4.00
イギリス人	3.60
日本人	3.63
フランス人	3.51
イタリア人	3.41
アメリカ人	3.37
西ドイツ人	3.30
………	

次のどの組織、機関を信頼するか？

教会	絶対的に：61%	深く：21.5%
国家再生愛国運動（PRON）	2.8%	
統一労働者党	3.8%	
国軍	深く：22.3%	一般的に：19.5%
「連帯」	全面的に：17.4%	深く：20.4%

ロシア人	1.98
ジブシー	1.94
ウクライナ人	1.84

ポーランドの危機の原因は？

体制	69.4%
ギエレクト時代の政策	61.6%
政府が社会を無視したこと	54.0%
政府の弱体	33.9%
「連帯」の要求	4.9%
西側による経済制裁	11.5%

どの国に住みたいか？

ポーランド	33.3%
西ドイツ	20.1%
西ヨーロッパ諸国	11.5%
米国およびカナダ	10.8%
社会主義諸国	5.5%
日本	3.1%

「自由と平和」運動

運動の拡がりど活動家の逮捕

More on the Freedom and Peace Movement in Poland
Uncensored Poland News Bulletin, No. 6/86, 20 March 1986, London

【編集部より】 これまでも本誌でたびたび取り上げてきたポーランドの自立的平和運動組織「自由と平和」の活動家2名が2月19日に逮捕された。逮捕者の1人、ヤツェク・チャプトヴィチがインタビュー（本誌1986年3月号に訳出）で語っているように、「自由と平和」運動はもともとは兵役の際の軍への忠誠宣言（ポーランド軍だけでなく、友好国軍への忠誠も誓わせる）を拒否して投獄された若者への支援運動として始まった。だが現在では「自由」や「平和」を、人権問題や環境問題まで視野に入れた広い概念としてとらえ、自己啓発や相互教育、青少年教育を通じて実現する方向をめざしてきている。

本号では、活動家逮捕関連の資料2点（国際アピール、抗議のハンストをした女性たちの声明）、および、前号で「われわれの目的 われわれの見解」と題して掲載した「自由と平和」運動綱領的文書の続きを紹介する。さらに、軍への宣誓拒否に関連して「エホバの証人」信者の兵役拒否についてのレポートも掲載する。 [訳：高橋初子]

支援を訴える国際アピール

International Appeal For Support

関係者各位へ

とりわけ、次の4つに。

- 西欧の友好的運動および組織（CODENE、END、IKV、MOC等）
- ロンドンのアムネスティ・インターナショナルその他の人権団体
- 西独「緑の党」およびその他のエコロジー保護組織、運動
- ポーランド移民センター

アピール

1986年2月19日、ワルシャワの警察当局は「自由と平和」運動の2人の活動家ヤツェク・チャプトヴィチとピョートル・ニュームチクを、犯罪組織の成員であるとして逮捕した。2人は懲役3年の刑に

処せられる恐れがある。かくして「自由と平和」運動活動家の逮捕者は5人となった。今後も、いつ新たな逮捕者が出てもおかしくない。

ヤツェク・チャプトヴィチとピョートル・ニュームチクの裁判は、われわれの平和的行動を犯罪的性格のものに仕立てあげる試みになるだろう。われわれ「自由と平和」運動の活動家を逮捕と刑事訴追から救えるのは、西側の友人や支援者の皆さんの適切な行動だけである。あなたがたの連帯のみがわれわれを救えるのだ。

このような極度に困難な時点において、われわれはあなたがたに援助を要請する。ヨーロッパの自由と平和はわれわれの一致した態度にかかっている。

平和で自由なヨーロッパ万歳！

1986年2月23日

レジェク・ブドレヴィチ
マレク・クルコフスキ (ヴロツワフ)
コンスタンティ・ミオドヴィチ
ヤン・マリア・ロキタ
ラドスワフ・フゲット (クラクフ)

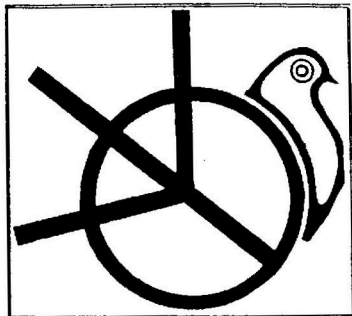


逮捕に抗議するハンスト 参加者の声明

A Hunger Strike in Church ; Statement No. 1

私たちは、投獄された自立的平和運動「自由と平和」メンバーのために、ポトコヴァ・レシナの教会にて本日より1週間のハンストを行います。このハンストと同時に、「平和と自由のための教育」に関するセミナーも行われます。このハンストは、私たちの友人や親戚——マレク・アダムキェヴィチ、ヤツェク・チャプトヴィチ、ヴォイチェフ・ヤンコフスキ、ピョトル・ニェムチク、トマシュ・ヴァツコその他の人々の投獄に抗議するためのものです。彼らの姿勢と彼らの行動は、政治家に乱用されことあるごとにマスコミに気安く使われていた「平和」といった種類の言葉に、本来の意味を取り戻させるものでした。ヴォイチェフ・ヤンコフスキは「汝、殺すなかれ」の教えに従って兵役を拒否しました。マレク・アダムキェヴィチとトマシュ・ヴァツコは、自らの価値観や愛国心

とは何かの理解にそぐわない、軍への忠誠宣言を拒否しました。ヤツェク・チャプトヴィチとピョトル・ニェムチクは数多くの友人とともにこれら宣誓拒否で裁判にかけられた者の弁護の声をあげ、万人の自由を尊重する精神ののっとった諸民族の間の平和を求めただけでなく、ヨハネ・パウロ2世の教えに従い、自己啓発と他人への教育を通じて身近な人々の間で平和を広めようと行動しました。私たちは、青少年教育について考え、ポーランドおよび世界の平和のために行動できる若者を作り、自身と他の人々の未来のために責任の一端を果たせるようにすることで、獄中の彼らを支援したいと思います。ポーランドおよび世界の平和と自由は、政治体制の問題というよりもむしろ、人間個々人の心の問題だと私たちは確信しています。人間個々人の心は、政治体制よりも大切です。社会秩序を作り、法を作り、暴力に反対するのは人間なのです。獄中の兄弟たちに連帯するこのハンスト週間は、私たちにとって、どうすれば子供たちの心の中に平和と自由が形成されるかを考える機会です。



1986年3月16日

マウゴジャータ・シフェジャフスカ
(ワルシャワ)
マグダ・コヴァルチク (ワルシャワ)
マウゴジャータ・クルコフスカ
(ヴロツワフ)
ズザンナ・ドンブロフスカ
(ヴロツワフ)
ヨアンナ・ラデツカ (グダンスク)
アンナ・ガヴリク (ヴロツワフ)

われわれの目的 われわれの見解 (続)

「自由と平和」運動の綱領的文書

Programme Documents of the "Freedom and Peace" Movement (Supplement)

自然環境の保護

生物圏の破壊、大気、水、土壌の汚染に脅やかされたわれわれは、自由とは荒廃していない自然環境の中で暮らせることでもあるべきであると気付いた。現在、天然資源は無駄使いされ、当局の近視眼的政策は取り返しのつかぬほどに自然を破壊している。これは主として、工業がカネの節約と称して必要な公害防止設備を取り付けなためである。浅はかな経営により土壌の劣化、森林消滅、水質汚染が起きている。

「自由と平和」運動は、自然環境の荒廃に関する十分な情報を得るために尽力する。

ポーランドには現在、原子力産業開発による脅威はない。原子力産業をわが国に導入しようとのこころみは、他国の経験に顧みて、不信の日で見られている。

「自由と平和」運動は、自然破壊や核実験に反対し抗議するすべての人々と協力するつもりである。

世界の飢餓と慈善救済活動

「自由と平和」運動は、現代世界の飢餓問題はわれわれの文明の最大の恥だと考える。東欧非武装化はポーランド国内や近隣諸国の状況改善に役立つだけでなく、貧困と大飢饉に苦しむ国々への援助資金作りにもなるだろう。

慈善による援助は、飢える人々の自立した生活を可能とさせるための構造的改革の代用とはならないにせよ、援助を必要とする人々に対してわれわれが自発的にできることが他にないのも事実である。このことは、ポーランド国内で貧困や病氣、孤独に苦しみながら暮らしている人々についてもいえる。

「自由と平和」運動は、貧窮者への援助を目的に掲げるすべての組織と協力する準備があることを表明する。

人類の進歩

現代人は、「人生の意味は何か」という根本的疑問を持っている。人間性から生じる個々人の諸問題に、どう対処したらよいのか？

「自由と平和」運動は、生き方を探ろうとする人たちの助けとなる講座や出版その他の活動を創始したり援助したいと考えている。

寛容

異なった視点を持つ人々の集まるこの運動において、協力の基礎となるのは、基本的問題の解決のために異なったやり方もあるという相互理解と、寛容とである。

一方、悪、抑圧、不寛容、他人の苦しみへの無関心などに対する批判がわれわれを結び合わせるであろう。

1985年11月17日

タルヌフ近郊のマホヴァにて

「自由と平和」運動

グダンスク

クラクフ

ワルシャワ

ヴロツワフ

Solidarność

兵役を拒否する「エホバの証人」

ヴォイチェフ・ヤンコフスキ

Jehova's Witnesses Do Not Serve in the Forces

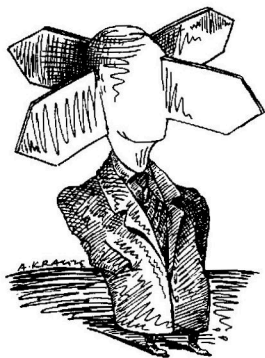
【編集部より】 この論文は地下紙「週刊マゾフシエ」No.156 (1986.1.30付)に掲載されたものである。論文著者が「自由と平和」運動のメンバーでもあるヴォイチェフ・ヤンコフスキは、1985年12月23日に兵役拒否のかどで3年半の刑を宣告された。同じ日に「エホバの証人」信者2名も同様の判決を受けた。この論文はヤンコフスキが獄中から秘かに送ったものという。

聖書を片手に訪ねて来ては人々を困らせる熱烈な信者たち、豚の血入りのソーセージを食べず、兵役に服さない人々——こんなところが平均的ポーランド人が「エホバの証人」について抱くイメージである。ポーランドには約9万人の「エホバの証人」があり、うち数百人の若き“兄弟たち”が兵役拒否により投獄されている。彼らは、兵役のかわりに課せられる別の奉仕も、そのほとんどが軍事的に益するものであるとして拒否しているのである。神の真のしもべはその信仰のゆえに苦しむことができなければならない、と彼らは言い、2年半から3年半の懲役刑を——憲法の保証する宗教の自由の侵害であると考えながらも——受けている。

兵役拒否を除けば、彼らは「模範的市民」である。厳密に非政治的で、国家により課せられた他のすべての義務を謙虚に遂行し、勤勉で、むつまじい家庭生活を送っている。ストライキその他の抗議行動には参加しない。彼らはキリスト者のおこないの模範を示している——嘘をつかず、悪口を言わず、盗まず、暴力を振るわず、姦通せず、麻薬は言うに及ばず、煙草すら吸わない。彼らが説きかつ行うことは、彼らの個人的信念ではなく、聖書の中で人間に告げられた神の命令なのだ。彼らは言う。神が「汝、殺すなかれ」「汝、盗むなかれ」と言われたのであり、神は墮落と悪徳のゆえにソドムとゴモラを滅ぼされた。またイエスは

「カエサルのはカエサルに返せ」と言われた。だから彼らは税金を納め、決してストライキに参加しない。聖書によればあらゆる権力は神により与えられたものであるため、どんな政府であろうとその命令が神の掟に反しない限り、彼らは忠実に権力に従う。当局は明らかに、あらゆる反政府活動を批判するこれらの“兄弟たち”“姉妹たち”に極めて満足している。彼らは集会に国営のスポーツスタジアムを使うことを許されているし、「神の言葉」の伝道に際して何ら障害にあうこともない。兵役拒否だけが唯一の問題点である。そしてこの理由だけで彼らは宗教教団としての公式な認知と登録を認められていない。

われわれと彼ら——腐敗した政府と今この世で闘う者たちと、人による支配が神による支配に置き換えられる日まで待つことに満足している「エホバの証人」たちとの間には、多くの点でへだたりがある。しかしわれわれは少なくとも1つの点で彼らに対してなすべき義務がある——それは、良心の囚人たちのリストに彼らのための場所をとることである。



地下定期刊行物の現況

『週刊マゾフシェ』収書部

Tygodnik Mazowsze's Survey of Underground Periodicals

Uncensored Poland News Bulletin, No.5/86,6 March 1986;No.7/86,3 April 1986

【編集部注】 ポーランドの人気地下紙のひとつ『週刊マゾフシェ』は、地下定期出版物の収集をもその任務のひとつとしている。以下は同紙154号(1986年1月16日)に掲載された、地下紙収書部責任者による戒厳令以後の地下出版物の動向に関する分析である。この分析に対する訂正と補足が同156号(1986年1月30日)に掲載されているので、あわせて紹介する。

当然のことながら、出版されているものすべてを入手することはできない。遅れて手もとにくる雑誌や新聞もある。いくつかの誌紙は、その存在は知れているが、実物はまだわれわれの所にたどりついていない。たとえば、ピドゴシチでは1984年から1985年の間に24種類が発行されたが、われわれが受けとったのは16種類だけだ。全部あわせればわれわれは、ポーランドで発行される地下出版物の80%を入手している。4年のあいだに異なる930種もの誌紙を収集したが、そのうち400種以上が今も出版され続けている。このことは必ずしも、数年前より今日のほうが出版物が少ないということの意味しない。ある出版物は消え去ったが、新しいものがその代りに登場している。つい最近登場したものに、ヴロツワフの学校新聞『ヴェルブム』やクラクフの「法の支配のための委員会」(KOPP)によって出版される『バラグラフ』がある。それぞれ1985年12月と1986年1月に出版が始まった。1983年12月から1985年12月までに出版されたおよそ650の刊行物のうち、今日まで生き残っているのはわずか210種類にすぎない。

こうした変化は、驚くべきことだが、保安警察(SB)の仕業とはほとんど関係がない。より重要な要因は、出版に関わっている人たちの疲労、またとりわけ小工場の誌紙の場合は地方版や全国版との競合である。一般に工場の小新聞の数は減少し続けている。地方で出版されている週刊紙や雑誌も同様である。だがこれは絶対的法則ではない。小さな町にいくつかの新しい、とても興味深

い出版物が現れている。増大しているのは青年誌紙である。1983年にはそれらは25種類を数えたが、現在は34誌が入ってきている。風刺誌紙の数の増大も周知の事実であるが、それらは一般に短命である。去年の選挙(85年10月の国会選挙)はまたとないきっかけとなった。これにあわせて新たに5種類が登場した。もうひとつ、増大中のグループがある。まじめな季刊誌である。しかし、さまざまな“技術的”困難のため、これらはきちんと定期的に出るといふわけにはいかない。その数は20種類にまで増加し、その大部分はワルシャワで出ている。専門的な定期出版物はほとんどないが、現に発行されているものは、たとえば保健関係の4種類のように非常に優れている。

古くから出ているもののうち、40種が70号以上継続している。18種は100号以上、4種は150号以上継続して出ている。最高記録はヴロツワフの『ズドニア・ナジェニ(毎日毎日)』で、戒厳令以前に発刊され、以来390号が出ている。ワルシャワの『ヴィアドモシチ(ニュース)』が2番目(174号)、『ヴォラ(意志)』が3番目、そしてわれわれの『週刊マゾフシェ』(153号)が4番目となっている。

印刷の質は一様でない。タイプで打ったサミズダート風の小新聞がまだいくつかある一方で、写真も載せたすばらしいオフセット印刷の『プシェグロント・ヴィアドモシチ・アゲンツィスイフ(ニュース展望通信)』(ワルシャワ)もある。この中間でさまざまな技術が用いられている。しかし

ながら状況は戒厳令後の最初の2年間よりもかなり良くなっている。

発行部数は実にさまざまであるが、この点に関しては誇れることが多くある。工場レベルでは発行部数は数十部から数百部が普通で、季刊誌や月刊誌は500部から2000部が出ている。その一方で地方レベルの出版物は数千部単位で出ている。

訂正と追加

『週刊マゾフシェ』第154号掲載のインタビュー記事で私が示したデータを一部訂正できることは、私の多大の喜びとする所であります。たった今私は、すでに廃刊になったと信じていたピアウイストクの「『連帯』情報プレティン』の11月号を受

け取りました。

100号以上を数える地下出版物の中に入れたシフィドニツェの「グロット」の発行数が、実は、「連帯」合法期以来の合計数で、1981年12月13日以前の発行数が40号近くになっていたことをつけ加えたいと思います。

地下出版物収書担当者

追伸——この機会を利用して、クラブの『フィラテリスタ（切手愛好家）』の編集部に対し、同紙を3部送付下さるようお願いいたします——単に文書収集のためではなく、仲間にも切手収集家がいるからです！

〔訳：川崎一郎／水谷駿〕

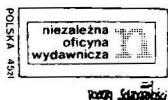
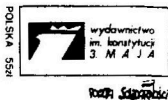
地下紙が伝える ヤルゼルスキ将軍のポーランド

Polskie Państwo Podziemne
WYDAWNICTWA NEZALEZNE

ワルシャワのプラガ区で「連帯」グループが戒厳令4周年にあたり記念番組を地下放送で流した。発信器はすぐ見つかった。それは大きなスーパーマーケットの横のコンクリート柱に鉄のチェーンでつながれた頑丈な台車の上のかごの中にあつた。衆人環視の中、警官がかごを蹴とばしたりその上にとびあがりたりして1時間半後に、手かぎを使って発信器をこわすことができた。『ティゴドニク・マゾフシェ』第152号

ソ連との友好は義務である。少なくともヤシチエンピエ炭鉱においては、このポーランド・ソ連友好協会は、特に文書により拒否を声明しないかぎり、全従業員が協会メンバーになることを決定した。『オシチ』第22号

カトヴィツェでの経済会議でメスネル首相が述べた。「ポーランド経済に関する詳細な情報は誰の役にも立たず、借款交渉におけるポーランドの立場を困難にするだけなので、今後は概要しか発表されない」。『NA I』第69/70号
〔UPNB, No 5/86 より 訳：水谷駿〕



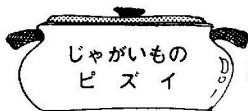
FUNDUSZ OPIROU
Szerzenie

DRUK RECYK-
LITOWY PIANINCEK



作ってみませんか ポーランド料理

工藤久代さんに関く



KUCH
VIA
POL
SKA

ポーランド料理といえば肉料理とジャガイモを連想する方が多いようです。本当はそうばかりでもなく、他にもいろいろあるのですが。といいつつも、今月はジャガイモ料理と相まりました。不思議な味のするジャガイモのだんご、ピズィ pzyzy です。

材 料

じゃがいも 約1kg
片栗粉 大きじ1

作り方

- ① ジャガイモの皮をむく。900g 位になるので、これを300g と600g に分け、600gの方は水にさらしておく。
- ② 300gの方を適当な大きさに切って水からゆで、やわらかくなったら、熱いうちにポテトマッシャーかフォークなどを使ってつぶす。完璧を期したい方は裏ごしを。つぶしたら冷ましておく。
- ③ 600gの方を、おろしがねですりおろす。水気が多いので、手のひらで少ししぼる。しぼりすぎてもいけない。じゃがいもをすったものは色が変わりやすいので、この段階以降は手早くやるのが大切。
- ④ ②と③をあわせ、片栗粉大きじ1を加えて混ぜる。
- ⑤ なべにたっぷり湯をわかし、塩を加える。④のじゃがいもを直径3cmほどのダンゴ状にまるめ、まん中をくぼませる。これを煮立った湯におとし、浮いてきてからしばらくしたところですくいあげる。
- ⑥ ソースをかけていただく。ソースは市販のソースでもよいし、ハヤシライスのソースやミートソースの残りがあればそれでもよい。また、ベーコンやひき肉と玉ねぎのみじん切りをいためたものをまぶしてもおいしい。他に、とかしバターをかけて青味を散らすとか、サワークリームでソースを作るなど、好みに応じて自由に。

料理です。ゆでたじゃがいもと生のじゃがいもの割合を1:2にすればよいので、分量もご家庭によって調節自由でしょう。わが家では大量に作る時はおろしがねでなくミキサーにかけてしまいます。余ったピズィは、ゆでてから冷凍します。使う時にはゆでて直すか、電子レンジにかけるかします。

ピズィは本来、肉料理のわきに添えるつけあわせなので、それ自体に味をつけることはしません。肉の方にソースやグレーヴィがかかっているわけですから。朝食などでピズィだけを食べる時には、ベーコンとか、豚のあぶらみを細く切ってニンニクといため塩味をつけたものをかけたりしていますね。ソースによって味の変化が楽しめる、味わい深い食べ物ともいえるでしょう。

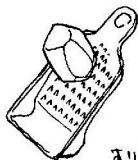
今、ポーランドでは冷凍ピズィも売っているそうです。



生のイモ 2 :



ゆでたイモ 1
の割合



生イモをすりおろすときは、なるべく変色しないように手早く。また、

すりおろすそばですべの湯とわかすと、次の手順も早くできる。

直径3cmほどの、まん中をくぼませた形にする。



巨大
赤血球
??

工藤久代さんのひとこと

じゃがいもをすりおろすのが少し手間かもしれませんが、あとは面倒なことの何もない簡単なお

【2頁から続く】る。

3月12日 ワルシャワの教会スポークスマンは、ポーランド司教会議が獄中の4人に対しハンスト中止を呼びかけたというウルバン政府スポークスマンの発言を確認。「自由と平和」運動活動家のT・ヴァツコが宣誓拒否の科で1年半の禁固刑を宣告される。

3月13日 ポーランド司教会議が5日間わたる会議を終えて声明を発表、政府の内政を厳しく批判。「祖国が深刻な経済危機にある時にイデオロギーの圧力行使することは理解しがたく、間違である。それは社会の意欲をそぎ、分裂させる」。

3月14日 党中央委員会でヤルゼルスキ第一書記は党員の増加が少なく不均一であると述べる。本年6月29日からの党大会の開催が決まる。

3月15日 P A P 通信、明日からの基礎的食糧価格の値上げを発表。8月には食肉価格引上げが予定される。「農産物の収穫状況がよければ」食糧品のこれ以上の値上げはないという。

3月16日 ワルシャワ近郊のポトコヴァ・レシナの教会で6人の婦人が、「自由と平和」運動活動家の逮捕と投獄に抗議して1週間のハンストを開始（本誌16頁以下を参照）。グダンスクで値上げ抗議の1000名以上の平和的デモが、ワレサ委員意、値上げを批判し、労働者には適当と考えるあらゆる手段で抗議する権利があると語る。

3月17日 ワルシャワ地下「連帯」が声明を発表、いかなる事前通告もない値上げは、1970年、76年、80年の政策決定スタイルの復活を意味すると述べる。「今回の値上げの実施方法は、官製労組の虚構性を再び証明するものである」。ソ連のシェワルナゼ外相が「友好訪問」のためワルシャワ着。

3月18日 ウルバン政府スポークスマンによれば、I M F との間でポーランドの出資金額について合意が成立。出資額は6億GDR（7億700万ドル）で、うち22%は交換可能通貨で、残りはズウォティで払い込ま

れる。加盟期日は未定という。

3月19日 ワルシャワの西側特派員が、解散させられた4労組（「連帯」、差別、自立、教員）による組合活動家の投獄に抗議する声明を入手。

3月20日 前夜から20日朝にかけて、ポーランド首席大司教座聖堂のグニエズノ大聖堂に賊が侵入し、墓所が荒され、墓所に飾られていた値踏みも不可能な貴重な銀製彫像類が盗まれる。

3月21日 政府経済計画委員会、1986～1990年計画を検討。素案によれば、この間の年平均成長率は3～3.5%で、これは現実的な数字という。

3月22日 党中央委員会、6月党大会の子備討論ガイドラインを発表、ポーランドは劇的試練を乗り越えた、この成果の強化のため国内の安定が必要であると。

3月23日 獄中でハンストをしていたA・グルスキとE・クラソフスキが、司教会議の要請を容れてハンストを中止。ポトコヴァ・レシナの教会で行われていた「自由と平和」運動弾圧に抗議のハンストが終わる。

3月24日 シチェチンのK O P P 活動家・コスツキが「非法法組織」に加盟したとして1年半の禁固刑に。

3月26日 投獄されているW・フラシニェクが看守数人に組織的暴行を受ける。

3月28日 公式報道によれば、グニエズノ大聖堂荒しに関連して4人が逮捕される。貴重な銀製彫像はすでに溶解されてしまったという。ハンガリーのカダル首相が「友好的実務訪問」のためワルシャワに到着、ヤルゼルスキ第一書記と会議。

3月30日 毎月最後の日曜日に定例となっている聖タニスワフ教会の祖国のためのミサに8000人が参加。ボグツキ神父がポーランドの良心の囚人すべてに道義的支持を表明。

3月31日 スペインのコンザレス首相、首相官邸で「連帯」在外調整局のミレフスキ代表と会見、スペイン社会党として「連帯」支持を保証。（編訳：水谷 駿）

編集後記

☆4月初め、ポーランド資料センター幹事会が開催されました。厳しい財政事情の中、今後どのように資料センターの事業を維持していくかが中心議題となりました。妙案の出ようはずもなく、会員・読者の一層のご協力、ご援助をあおぐという、最もオーソドクスな結論となりました。われわれの努力は当然として、会員・読者の皆様にも、1人でも多くの会

員・読者を紹介下さるようお願い申し上げます。

☆この間何度か、『月報』の合評会、読者会を設定してきましたが、運営がなかなか難しく、今後しばらくの間中止いたします。ご出席頂いてきた方々にはお礼を申し上げ、ご意見は今後のセンター運営、『月報』編集に活かしていきたいと考えます。

☆1年間連載して好評だった「ポーランド現代史断章」の続篇を企画中。秋からスタートする予定で準備を進めています。 1986年4月18日 み



クリスマスのごちそう代を節約しよう!

'86年春期開講!! マヤコフスキー学院

ロシア語

コース	開講	曜日	講師
初級コース	4/14	月	近藤 昌夫 浦 雅春
中級読物 コース	4/15	火	坂本 博子 谷 垣 恵
文学鑑賞 I	4/18	金	江川 卓郎 伊 東 一
文学鑑賞 II	4/16	水	原 卓也 長 纈光

ポーランド語

コース	開講	曜日	講師
会話コース	4/14	月	レナータスフィンスカ
初級前期 コース	4/15	火	長 興 容
初級後期 コース	4/17	木	長 興 容 工 藤 幸 雄
中級コース	4/18	金	坂 倉 千鶴 諸 星 和 夫

- 授業開始 / 4月14日～4月18日
- 期間 / 6ヵ月
- 時間 / PM 6:30～9:00
- 授業料 / 入学申込金5,000円(ロシア語・ポーランド語30,000円)
- 問合せ / 中野区東中野 1-41-5 TEL 362-8771-2 マヤコフスキー学院

発行所・ポーランド資料センター

〒101 東京都千代田区三崎町 2-10-5 一国ビル 3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

事務所は月・水・金 14:00～17:00

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)